#### 怪談のシーラカンス 縊鬼はなにを否定するか

怪談文芸研究会 二〇二二年十二月十七日

井上真史

### 夏目漱石『吾輩は猫である』 一九〇五

首をくくるというがこんな時にふと誘われて死ぬ気になる 速などというやつが頭の中をぐるぐる駆け回る。よく人が たいへんさみしい感じがする。暮れ、戦死、老衰、無常迅 神楽坂の方から汽車がヒューと鳴って土手下を通り過ぎる。 7 の方へ我知らず出 のじゃないかと思いだす。ちょいと首を揚げて土手 例の松た、なんだい」と主人が断句を投げ入れる から風がお濠の向こうから吹きつける、 つになく富士見町の方へは足が向 いつのまにか例の松の真下に来ているのさ」 てしまった。ちょうどその晩は少し曇っ かないで土手三番町 非常に寒い。 の上を

ぜひやることにしようと思ったが、もし東風が来て待って わふわするところを想像してみるとうれしくてたまらん。 わる。しわりあんばいが実に美的である。首がかかってふ ぼくも一つ試みようと枝へ手を掛けてみるといい具合にし ある。はたしてそれが事実ならべつだん恐るるにも及ばん、 という話がある。一人が台の上へ登って縄の結び目へ首を リシア人は宴会の席で首くくりのまねをして余興を添えた 下がっては命がない、あぶないからよそう。しかし昔の ないかしらと、あたりを見渡すとあいにくだれも来な どうにかしてあすこの所へ人間を下げてみたい、 あいい枝ぶりだ。あのままにしておくのは惜 らん。見ると、うまい具合に枝が往来の横へ出ている。 上に松は何十本となくあるが、そら首くくりだと来て見る だれでもこの松 約 11 台を引かれると同時に縄を緩めて飛びおりるという趣向 入れるとたんにほかの者が台をけ返す。首を入れた当人は しかたがない、自分で下がろうかしらん。い とぶらさがっている。どうしてもほかの松では死ぬ気にな と必ずこの松へぶらさがっている。年に二、三べんはきっ にうちへ帰ったのさ」 東通り話をして、それから出直そうという気になってつ ると気の毒だと考え出 の下へ来ると首がくくりたくなる。 した。それではまず東風に会って やいや自分が しいものだ。 だれか来 で ギ

「それで市が栄えたのかい」 と主人が聞く。

なぜこういう名がついたかというと、

昔からの言い伝えで

の台

「首掛けの松さ」と迷亭は襟を縮める。

首掛けの松は鴻の台でしょう」寒月が波紋をひろげる。

1のは鐘掛けの松で、土手三番町のは首掛けの松さ。

1

べる。
「いよいよ佳境に入りますね」と寒月は羽織のひもをひね

不思議なことがあるものじゃないか」が一種の因果法によって互いに感応したんだろう。じつに言わせると副意識下の幽冥界とぼくが存在している現実界でもその時は死神に取り憑かれたんだね。ゼームスなどに一足違いでねえ君、残念なことをしたよ。今考えるとなん「見ると、もうだれか来て先へぶらさがっている。たった

### ●鈴木桃野『及さのうらがき』

出版年不明(著者の鈴木は一八〇〇-一八五二)

り。 同 小山 れも叔 某よく酒を飲 父酔 雪翁がる あみ、 話に、 Ĺ 元かしら某、 咄 身 振りなどする者 屋敷 麹町 あ 也。 ŋ 組 け

の日の永き頃、同役より合のことありて、夕刻より洒

宴あり。

不興なりし頃、忽忽として来たれり。家人もみな其伎を見るを興として、待ども来らず。大に彼同心は給事ながら来るべしと申約せしに、其日来らず。

物去らんこと請いけり。 にて首を縊る約束せし間に、 家家来ゆるさず、先主人及び一座の客人に其趣申通ずる間 御断の趣申入、直に立帰る」といいてさらんとせしかども、 の趣を尋ねさせしに、「其事別事にあらず、 ても、聞にも出ず去ることやあるとて、無理に引出 より合に、先程より相待こと久し、 ひかへ候へと告げしに、何用なるかはしらねども、 「やむを得ざるの用向にて、御門前に人を待たせたれ やむを得ず」といいて、 縦令さり難き用 くひ 違 1 御頭衆 御門内 なりと ひた

続けざまに七八盃を飲す。は弥引出して酒を飲すべしとて、座に引出し、先大杯にて主賓弥あやしみて、思ふに乱心と見えたり、かからんに

るに酒 るを請 余程酪 く一つ二つ伎を奏し、 扨これにて許し玉へ」といふを、 主人声をかけ、 ぶ事は忘れられたる様にて、 をすすめ、 : 酊の色見えしかば、賓主是を興として、かわるがわ 例の声色所望也といへば、よんどころな 動静を窺ひける。一時計りする内、 又立出んとするを、 又七八盃飲ませけり。 別に乱心とも見えずな 賓主各盃を与へ、 先去

りなっ

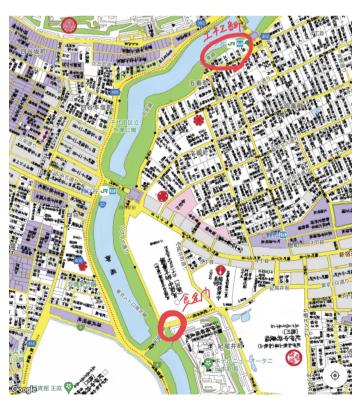
より申通ず。人差出すべしや」といいたり。

其時家来立出て、「只今食違い御門内に首縊りありと組合

て、先の様子を尋るに、夢の如く覚へてさだかならず。他人を取りたると見えたり。最早此の縊鬼は離れたり」と賓主ききて、「扨扨先頃の縊鬼、此の者を殺すこと能はで、

断りをなして後、 も縊るべし、今日は て首を縊るべ 真似して、穴おそろしやおそろしやといいけり。 たく思ひしは、 言背きがたき義理ある者の如く覚へて、 其頃食違ひ迄来り 扨今は縊る心ありやと問ふに、 御門迄付来り、 しとい 何の故といふことをしらず」とい 其意に従ふべしといへば、 御 しは、 早く断をいいて来るべしとい 頭の が、 元へ御給事に行約束な 夕刻前な 吾辞すること能 自から首に環をか 其人の義そむきが 一人あ 其人さらばと は ず、 りて いけり。 、へば、 れ 此所に 如何に か ば へる 其 其

っしといいあへりき。かかる事もままある事にや。全く役を践を重ぜしと、酒を飲みたる徳にて、命を助か



『吾輩は猫である』と『反故のうらがき』の現場の位置関係

### ●縊鬼 水木しげる『決定版 日本妖怪大全』

(イラスト同)



はやはり決まっていた。
りすることがあった。こうした中でも、面白い話をする者
昔、よく火消しなどが集まって酒を飲み、色々話をした

をする男がいない。やがて門の外に現れたが、しかしあるとき、組の集まりがあるのに肝心の面白い話

「急用があるので、今日はこれで……」

そのうち、門の外で誰かが首をくくったという騒ぎにな男は酔って約束を忘れたらしく、長々としゃべりはじめた。飲ませた。そして、一席でも面白い話をしてみろという。という。組頭は茶碗に酒を注ぐと、何杯も無理やり男に

どんな約束をしたのだ」「これでお前に憑こうとした縊鬼は離れた。お前はさっき、

った。それを聞いた組頭は、

すると男はこう答えた。

くくらねばならないような気持ちでした」「夢のようで、はっきり覚えていませんが……、何か首を

なく死にたくなるのは、縊鬼のせいだといわれる。川に落ちて死んだ者の霊が引っ張るとされ、川端でなんとすなわち、縊鬼というのは一種の憑き物のようなもので、

七年)を合わせて再編集) 講談社本妖怪大鑑』(二〇〇本妖怪大全』(一九九四年)、『図説日本妖怪大鑑』(二〇〇水木しげる『決定版 日本妖怪大全』二〇一四年(『図説日

話の元ネタ→『反古のうらがき』絵の元ネタ→『夜窓鬼談』

## ●石川鴻斎『夜窓鬼談』明治二十三年(一八九○)

中国志怪小説、若い頃旅した際に方々で聞き集め中国志怪小説、若い頃旅した際に方々で聞き集め 中国志怪小説、若い頃旅した際に方々で聞き集め

だった。自殺した霊が次の自殺者を招くという要素 通点はなさそう。 が るものだから、 を驚かそうと化けたものである。 基づく説教をする話である。この鬼の姿は死霊 の中身は「反古のうらがき」とはまるで別物。 人を殺す)という自殺者の死霊に、 :暗に示されている点と縊鬼の表記以外、大きな共 帯を拾った男が、「またそれを使うから返せ」(= 縊鬼も非常にインパクトある良い絵であるが、 死霊もおみそれしましたとなったの 男は平然としてい 中国の死生観に が男 話



### ●根岸鎮衛『耳袋』巻九 悪気人を追う事

出版年不明(一七八四から一八一四年執筆)

少しの町有り。
下谷立花(柳河城主、十一万九千石)の屋敷のもよりに

七ツ時に出宅をすべきに、 いえる水茶屋あり。 より段々あるき参り、 せんと、日本橋通をまかりに そこの者なる由、 目黒の 芝口に定式に休みなどなせる信 不 刻限早く八ツに起き出で、 しようやく七ツなれば、 動を信じ度々参詣 なし、 それ 参詣 !楽と 或 時

ゆえ、 物もとまりしゆ 付き来る者あり。 来るやと改め見れど、さらになし。 然るに、日本橋よりに候や、 早足に歩けば早く追 え、我が足又裾に糸などありて右へからま 振り返り見れば、 V; 立ち止 あとよりざわざわと音 縄ようの物付け まれ ば か 7 の 縄 ようの 来り候 L て

寄りければ、水茶屋は朝立ちの客を心がけ灯など見ゆるゆえ、歓びて立水茶屋は朝立ちの客を心がけ灯など見ゆるゆえ、歓びて立に立寄り、いまだ夜更けゆえ、町家もいまだ戸あけざれど、何とやら心持ちあしきゆえ、急ぎて右のしがらきの茶屋

「今日はさてさて早くいで給う」

れど、門口の戸を見けるに、やはり付き来りし縄ようのも刻限を取違えし事など話して暫く休み、いまだ夜もあけざと家内にても挨拶して、茶など煮てたべさせけるゆえ、

病み程

気のこもりて慕い来りしや」と、 けるや。右縄の追い来るを、 寄 身の上をも祈り、それよりかの所にもたずぬる所あ るゆえ起き出て、 夜  $\mathcal{O}$ 語 ける」といいしに、「我が身の災難を明王の加 わ 0 など借りうけて横になり居しが、 んもあ りぬ。 せければ、 門 けさまでもかかる事なかりし」とそのあ しがらきの方を見しに、表をたて、忌中の り、支度(食事)などして、 П いけず、 ににあ りけるゆえ、 「いかなる事にや、 気分あしき由、 「帰りにこそよるべき」とて目黒 内 入り、 始めは蛇と思いしが、 暫く店に休 夕方になって帰りが 右茶屋の亭主首縊 我が友のもとへ来たりて 程なく夜も明け往 門口をしめ みたき・ たりにて聞き合 札あるゆえ、 護にての 由 り相 へ参詣し 断 いりて立 け、 来も 縄に がれ 黒て ま 悪

# ●面村白鳥『煙霞綺譚』 巻之 安永二年(一七七三年)

日本随筆

大成第

期四

やか によりて人に描るもあり。 経 人縊 てほる に取 死たる時、 時 捨べし。 は 地中ふか 其 所 其所にて再び 0 くしづ 土を堀り 4 て見れ 入り 人縊死るの 出 ば L 物 が あ 禍 たし。 ŋ 取 必ずす し

·山三柳 | 醐随筆』寛文十年 (一六七〇) の 記述概

うなものが出てくる。 ると魄も下って落ちる。 人が首吊りした下の土をすぐ掘り返すと、 これは魂魄の魄である。 「麩炭」のよ 首吊りをす

近 代以降の類 話

。吾輩は猫 温である。

と言っていると俺が教えてやろうかと死神の登場。 くなり「首吊ったことねえからやり方わからねえな」 三遊亭圓 朝 『死神』 冒頭 男が理由 なく急に首を吊りた

民話世界での 展開

#### )久奚浜町教育委員会『久奚浜町の昔話 ふるさとの

かしばなし」 昭和五二年 (一九七七)

6 1 首つりの

すか その手紙をことずけに行く。ダーと一生懸命に昔のことで 方から声がして、 そうしたら、なんと、うんこしかけとるところが、天井の でうんこがしたくなって、 2ら走って行くですな。走って行って、そうしたら途中 の飛脚 商売の男が手紙をことずかって、どこか 、なんと、 野 せんちに飛び込んだですわ。 まあ

> まあ、 紙をことずけてからでねえと首つるわけにゃいかんで」て て、 「いや待てしばし、自分は今飛脚を頼まれておる。 「首つれ、 首つりいうことはそれだけおもしれえこときゃいな思っ ほなひとつ首つってみよ思って、首つりかけたが、 おもしれえぞ。 首つれ、 おもしれえぞ」言うて。 この手

言う、そういう話があります。 L しゃあ、おそろしや、首つりちゅうことはこんなにおそろ がぶらあんとさがっておって、それを見てびっくりして、 便所へ飛び込んでみた。ところが、飛び込んだら一人の男 で行って、手紙を届けて帰ってきて、ほうしてそのもとの ほてその便所を飛び出て、 って首つらあ思って、 「ほな、もどりに首つるから待っとってくれえ」言うて、 いことかと思って、自分は首つりをやめてもどってきた 一生懸命になって、その目的 一生懸命帰りにはそこまでもど 0) <u>`</u>所ま

話者 市野 野 山 下長次郎 明治34年生まれ

- 5 首 んぶらんしよ」と声だけで誘う。 うり 狸 (徳島) 概要は久美浜の (四国民俗) 事 例とほ ぼ 同 じ 0
- が :首を吊って自殺していた。(『郷土』昭和六年) 長野県上伊 那 サソイノカミ。 医者を呼び に行 た

男

•

格 香川 好をしてい (のクビツリガミサン。当人にしか見えない。 る。 木の枝に縄をかけ輪を作り首を入れこっ 普通 0

に「そなに楽しいならならばおらも」と首を吊ってしまう。ちを向いてにこと笑う。それを繰り返してるのをみるうち

- に救われる話がある。・「大江のむかしばなし」には死神に魅入られるも弘法大師
- ・カゼ 総合日本民俗語彙 日本妖怪変化語彙
- ・ミサキ

として祭らないといけない。異常死と結びつき。村内で自殺など異常な死に方をした人が出た時、ミサキ

首をつりたくなった。 木を見ていた。すると、なぜかその木の枝で、むしょうに

に首を入れた。
って柿の木の枝に縄をぶら下げて縄の先に輪を作ると、中って柿の木の枝に縄をぶら下げて縄の先に輪を作ると、中おかみさんは納屋に入ると縄と台を持ってきた。台に乗

ったと思い出して、われに返った。その時、そや、その前にお得意さんとこの配達が残っと

縄に、お婆さんがぶら下がっていた。 配達から帰ってみると、そのままにしてあった柿の木の

現代怪談への展開

六巻六八話「柿の木」 新耳袋 二巻二七話「玄関先」二巻六六話「首吊りの木」現代民話考七 赤ズキン 学校に出る。首吊りに誘う。

小野不由美『鬼談百景』、『残穢』

### ●新耳袋六巻六八話「柿の木」

もうずいぶん昔のことになるらしい。Fさんの知り合い木原浩勝 中山市郎 平成六年(一九九四)

家に醤油屋さんがあった。

その庭に一本の立派な柿の木がある。

ある日のこと。醤油屋のおかみさんが何気なくその柿